

輝け！シン尾花沢中

第168号

令和8年

1月22日

ゆくてののぞみ 語りつつ 自律をめざす わが学園

保護者の方に支えられ、雪にたくましく立ち向かう尾中生

今シーズン最強の寒波が長期間居座る予報となっております。

特に、1月20日（火）の朝夕は猛吹雪で、保護者の方には送迎等でたいへんご協力いただきました。ありがとうございました。

20日（火）は、東側の駐車場から昇降口まで歩くのにも苦勞するほどの猛烈な風と雪でした。私も、新町十字路まで歩いたのですが、風で息苦しくなり前に進めなくなるほどでした。

しかし、尾中生は、家から、バスから、車から、しっかり歩いて登校していました。

「さすが、尾花沢の子供たち、たくましいなあ」と感心しました。

これまでの尾花沢での雪に関わる体験（いわゆる「普段」）が、尾中生の現在のたくましさを創り上げていることを実感したところです。

私も、隣の大石田町に暮らしているので、大雪による大変さは理解しているつもりです。昔は、現在よりも除雪システムが整っていなかったこともあり、中学3年生の受験間近な時期も、帰宅すると両親が帰ってくるまで、雪下ろしをしていた記憶があります。「なぜ、こんなに苦勞する地域に生まれてしまったのだろう」と思ったこともありました。

しかし、大学生となり上京した時に、その考えは一変しました。関東でも年に1～2回は、雪が5cmほど積もる日がありました。そんな積雪のある日、大学の図書館から窓の外を眺めていると、ステンステン転んでいる人が見えました。また、何台もの車が普通タイヤのままだったのか、同じ場所で同じようなスリップ事故を起こす光景も見えました。

自分だったら「もっと用心して歩くのに…」「自分は冬用タイヤ（当時、スタッドレスタイヤ）だけど、それでも用心して運転するのに…」と思えたのは、自分が雪国に育ったおかげだと、自分の故郷に感謝する気持ちが生まれました。

確かに、命にも関わることですので、安心・安全が最優先であることは間違いありません。ただ、雪を嘆くのではなく雪と共に生きること、困難に打ち克つ強さや我慢強さなども養われるのではないのでしょうか。

保護者の方々に支えられながら、尾中生はたくましく育っています。このたくましさは何物にも代えがたい尾花沢の宝だと思っています。



吹雪の中、歩いて帰る尾中生



吹雪の中、たわむれる尾中生



吹雪の中、除雪に励む尾中生

【文責：校長 工藤雅史】